**「＜人がどのように神になるか＞を知っていた、**

**いのちの師である十字架の聖ヨハネ」**

　　　　　　Loys de Saint Chamas ロイス・ドゥ・サンシャマ

　　　　　　　　　　　　　—

今日の研究会での、十字架の聖ヨハネについてのこの発表では、次の順序でお話したいと思います。

1. 十字架の聖ヨハネの紹介。人間の位置、著作の種類、その思想の方向性。彼の関心の中心である＜いのちの動き＞における＜身体＞の位置をかいま見ることができる事と思われる。
2. 主に、『霊の讃歌』B、１４−１５節からの抜粋を読む。
3. 神との関係を、正しく理解し生活の中で実践するために、彼が貢献した部分を明らかにする。
4. 皆さんからの質問に答える。

＃＃＃

**要約**

1. ホアン・デ・イエペス　1542年から1591年まで　スペインで生きた　修道士、カトリック司祭で、＜十字架の聖ヨハネ＞の名で知られている。その生涯の聖性を認められ、１７２６年に列聖された。１９２６年には、その霊的生活についての著作をもとに＜教会博士＞と宣言され、＜神秘知識の博士＞と呼ばれています。１９１０年頃から、かなり多くの哲学者や大学人から注目の価値があると考えれるようになった。
2. 大学教育を受けた英才ではあったが、まず教師であるよりは、実践する者であり、導き手であった。自身神との関係を生き、また同じように神との関係を生きようとしていたたくさんの人々に出会い、この道を共に歩む導き手となった。
3. 彼を、なんらかの「学派の長と」見なす事は本来できない。というのは、「もはや神の栄光しかない」山の頂に登頂するように弟子たちを彼は方向付けるのであるが、とどのつまり、目の前に既成の道などはないからだ。＜道＞はつまり各自それぞれの道を行く事になるのである。
4. それにもかかわらず、彼によって、インスピレーションを得、その教えに歓喜することまであるのはなぜだろうか？彼の著作が示している事柄を見てみよう。
5. 理論にたいする実在の優位
6. 神と人間が相互に作用し合っている現実
7. 各人が無限に進歩できるという事、特にもっとも慎ましい人々
8. 実践的な知識を伝える事は有用ではあるが、同時に、神は至高の自由をもって、ひとりひとりを呼びかけ、それぞれの道を開き導く。
9. 聖書の話やテキストが伝える神の働きかけと、実際に人々が経験する神の働きかけの間には連続性と類似がある。
10. 人生には、神との関係において時には両立しえないと感じられるいくつかの側面があるが、実はそこには真の一貫性がある。
11. 神について、そして神と人間の生きた関係についての知識をもつことはできるし、その価値、射程と関連性を私たちは知性でかなり理解することができる。しかし同時に、その私たちの知識が

、未来へとむかう原動力となるよりは過去を説明するものであるのなら限界があるという事。

1. カトリックの組織神学は、引用し使っていたことからも、知識があり尊んでいたが、彼の思想は、組織神学ではなく、むしろ、彼が検証している事実の現実と事実間にある一貫性を追うことに主眼がある。
2. また彼に特徴的な寄与をあげるなら、
3. 信仰は、＜確か＞であり同時に＜暗い＞もの
4. 信仰は、暗夜である。
5. 信仰は、神に＜触れる＞。
6. 念祷(oraison) の実践（修練）は信仰の実践（修練）である。
7. 信仰は、感覚によって知りまた知性によって理解する事のできることを支えとしながらも、神ご自身まで到達する。
8. すべての見えるもの、聞こえるもの、感じられるものは、神へと向かう事ができるが、それらのなにものも、知られるもの理解できるものも、神を直接与えることはない。
9. 見えるもの、聞こえるもの、触られるもの、感じられるものは、神ではない。ゆえに、常に前進し、それらのなにものにも満足しないことが必要である。
10. 希望は、＜所有していないもの＞に関わる。
11. 神との関係において一定のレベルに達したと意識することには、そこでとまってしまう危険が内在する。なぜなら、達成されたことは、常に、私自身よりも神の業であるのに、それを自分から出たものであるとしてしまうからである。
12. 豊かさや賜物は、所有されてしまった時点で不正となる。この豊かさと賜物を与えた神にそれらを積極的にお返しするのでないのならば。
13. 愛は愛によってしか報われない。
14. 神に向かって神と共に歩む道中では、乗り越えるべき障害物や、打ち勝つべく誘惑に出会う。
15. ある時点で良いのもので、有益であったものは、それゆえに求めら大事にされた事があったとしても、別の時期、次の状態では、もはやそうではなくなり、それをやめたり遠ざけたりしなければいけなくなる。
16. 神からくる賜物は、私たちが行動し生きるための能力に触れ、私たちの中に徳（des vertus）を注賦する。
17. 私たちは、神と一致するように、そのために造られている。
18. 神は無償でご自身をお与えになる。
19. 神との完全な一致に達してそこに安定して留まれる人はほとんどいない。「いったいだれのせいなのか？もちろん神のせいではない。」
20. 純粋な観想は受け取ることにある。
21. 神との一致は三位一体とともになされる。人間は自分自身を父なる神から受け取り、子なる神に結びつけられ、聖霊の息吹を出すものとなる。
22. 人生のゆうべに、人は、愛について裁かれるであろう。
23. 判明できるものは、神との接触、交わり以下のものである。
24. 彼の著作からひきだされる人間観は、その要素に関しては多くの人と同じであっても、それらをどうつなげるかという点では、独自性がある。
25. 彼が頻繁に使う言葉に、進歩、ニュアンス、＜まだ＞、目の前にある走行空間、到達すべき点、縮小する不完全さ、などがある。これは、一言で言えば、＜いのちの動き＞運動である。
26. 彼は、罪とその醜さ、その結果の悲しみを、その重みを十分にはかりながら、描写しているが、
27. 同時に、人間ができる事、徳を実践し修練することで進歩することにも、十全な注意をはらっている。しかし、神からの注賦なしには、ある程度にしか進歩する事がない。
28. ゆえに人間の働きかけ(l’action)自体が影響を受け変容されるのは、それが神との交わりのなかでなされ、神の働きかけへの応答として対応しながらなされる度合いに応じてであり、神が最も内的でリアルな変容を、かれのうちに働き、起こすのである。
29. この働きかけを受けるのは、現実の人間であり、身体的なものであれ、感覚的なものであ、愛情であれ、知的、霊的なものであれ、人間を構成するすべてを伴った、現実の人間である。人間の複雑さと多層性をこえてあらゆる方向に影響が行くヴィジョンが彼にはある。神との共働は、あらゆる層で行われ実践される。
30. 人間は、継続のなかに、歴史のなかにいる。個人レベルでも、社会レベルでも、一般的なレベルでも。この歴史のいかなる部分も、神との関係とその動きの外にあるものはない。
31. ひとりひとりと他者との関係も、神との関係にとって重要である。人は受け取り、与え、恊働する。従順もこの関係のつながりのなかに位置づけられる。
32. 人間の内深くには複数の層、レベルがある。これはとても異なってはいるが、神にもあてはまる。
33. 人間の中には、記憶、知性、意思が区別され、それぞれ記憶／希望、知性／信仰、意思／愛と結びつけられる。これらの３つの対神徳は、すべて、進歩と浄化の対象となりうる。
34. 神が記憶を満たされる時に、感じられるのは、忘却とともに、今までになかった種類の安全感である。
35. 神が信仰を満たされる時に、感じられるのは、謙虚で深い安心と平和である。
36. 神が愛を満たされる時に、感じられるのは、深い不十分さの感情であり、同時にいのちの躍動の喜びである。
37. 働きかけが純粋であればあるほど、それが作用されている状態を捉えられないものである。それは、とても透明な空気のみちた部屋や、（あるいはまったくきれいな水が満ちたところに）、太陽の光線が差し込む時のようなものである。なにか捉えることができたとすれば、それはかえって不浄の部分（純粋でない部分）があるという印である。それとは逆に、神との交わりなしには存在しない、働きかけ自体に意識が完全に捉えられているのである。ゆえに、働きかけは、純粋であればあるほど、神との恊働となる。
38. 人間の動きは、直線的に上昇するものではなく、行ったり来たりを繰り返す。活動的な時期やほとんど動かない時期、熱中や意気消沈、喜びや苦痛の時期や全く何も感じない時期などがあるのである。